

『ロスト・タブレット』続編：その3『最終章』

◆ 2017年7月 ロスト・タブレット見つかる

2017年5月27日

『過去は物語の始まりである』 シェークスピア

これはタブレット発見の顛末について、時空をほんの二ヵ月ばかり先走りさせてみた出来事である。

7月半ば、勝呂は門司の兄貴（自称カルロス）が行方不明だという報に驚いた。兄の長女由紀からだ。折よく日本滞在中だった勝呂は新横浜から急遽飛び乗った新幹線の中で反芻していた。足の悪い兄が家を出たのは五日前だというのに何の連絡もない。高齢の兄だがこれまで徘徊したり、道に迷ったりしたことはない。黒塗りの高級車に乗った3人の男が目撃されていることから拉致された公算が大きい。その中の一人は外国人だったようだ。その話を聞いた勝呂は咄嗟にボゴタでマリアの父アンブロシオが拉致されたときのこと思い出した。やはり兄もタブレットの秘密に絡んでいるのか。のぞみ24号は一駅で名古屋だ。京都まではインバウンドの外国人が結構乗っている。新神戸を過ぎると乗客はまばらになってくる。小倉までおよそ4時間半の旅だが今回はいかにも遅い。新幹線の横揺れもこんなだったか。アンブロシオ失踪事件（第9章）を回想する。あの時はラ・フォンターナ・ホテルに10日も拘束されていたのだが、当のアンブロシオはホテル滞在を楽しんだようだった。お得意の要塞の話で煙に巻いたのだ。本人知ってか知らずか、タブレットの在り処を聞き出すために仕組まれた拉致・拘束だったはずなのに……。

今回の兄カルロスもどこかのホテルに拘束されているのか？小倉から門司港までは在来線で三駅だ。終点の門司港駅はJR九州鹿児島本線の起点なのだが、その駅舎は1914年当時の鉄道黄金時代に復元・修復する工事で目下のところ外観は揚げない。門司港繁栄時代のシンボルが2019年には復元されるのだという。役所の地域振興課に勤めている由紀がレトロ門司港観光案内所で待っていた。予期に反して由紀に落ち込んだ様子は全くなかった。というのも勝呂との事前の電話での捜索作戦で、北九州全域のホテルに探りを入れることにしていた結果、由紀は早くも門司港ホテルに目星をつけていたからだ。これは話が早い。そして、これがほんとに拉致事件だと分かった時に備えて、由紀は手回しよく役所の国民保護課の同期の友人を伴っていた。三人は先ずはそれとなくホテルのフロントで滞在5日前後の様子を窺うことにした。確かにカルロス兄は車椅子で二人の男に付き添われてチェックインしていた。8階最上階の海峡側のキャロライン・スイートの部屋だった。三人の男が交互に出入りしており、その一人はアルゼンチン人らしい。アルゼンチン領事部の者だと名乗っていたらしい。この5日間特に騒ぎもなくホテル側は何も問題視していないことが判明した。ただ一つだけ勝呂が奇異に感じたのは、兄カルロスが初日に和布刈公園が見える部屋にしてくれとせがんだことだった。門司港ホテルの部屋の向きは海峡側ともう一方はレトロ門司港側に面しており、和布刈公園の小高い丘が望める部屋はどこにもないのだ。兄が部屋の向きと和布刈公園にこだわったのには何か訳があるのだろうか。

奇しくもこのホテルは世界的建築家のイタリア人、故アルド・ロッシの設計だった。福岡のホテル・イル・パラッツォも彼の設計だ。最上階のスイートはレトロ側がアルド・ロッシ・スイート、

海峡側はキャロライン・スイートで最高の眺めになっている。三日目にはこの宿泊者の立っての希望を汲んで支配人はしぶしぶ屋上に上ることを許可したのだという。その時カルロスは「ここならパゴダがよく見えるね」と言っていたいへん喜ばれたと語った。その時勝呂は心のなかで（しめたこれだ！）と叫んだ。



レンガ色の四角い建物が門司港ホテル。左手の黒川紀章の設計した高層マンションのさらに左の山の上にパゴダが望める（矢印）

ルームサービスで部屋に入ったスタッフの話ではこの宿泊者はいつ行っても二人の男に嬉々としてアルゼンチン・タンゴの講釈をしていたという。まるでボゴタでのアンブロシオの時と同じではないか。アンブロシオは要塞の蘊蓄を傾け、カルロスもアルゼンチン・タンゴの講釈だった。プグリエセの「レクエルド」や「ラ・ジュンバ」から始まってピアソラの時空を超えた現代性をとくとくと解説していたという。そして極めつけは、何と言っても、カルロスが信奉するディ・サルリ楽団についてだった。なにしろタンゴの精髓を真に伝えるのは新古典派の巨匠カルロス・ディ・サルリにおいて他にいないというのが兄カルロスの持論なのだった。ピアノとバンドネオンの鋭いスタックとなんととも優美な弦のレガートが奏でる気品と哀愁はエル・セニョール・デル・タンゴ（タンゴの紳士）と言わしめる所以なのだ。その時部屋のテレビにはダンスを伴ったアルゼンチン・タンゴが流れていた。なんとという美しい旋律だ。「エス・ウナ・ホジャ（お宝だ）！」勝呂は思わず叫んだ。このホテルのコンシェルジュが宿泊者のわがままを受け入れてYouTubeからダウンロードしてくれたのが特番の名曲「レクエルド(追憶)」(本書HP Gallery1) だった。いつ聞いても



鳥肌が立ち、涙腺を刺激する。超絶技巧ばかりを競い合う昨今のアルゼンチンのタンゴ・ダンスにあって、タンゴの原点はこうだと教えてくれるファン・カルロス・コペスとロレーナの踊りが秀逸だ。

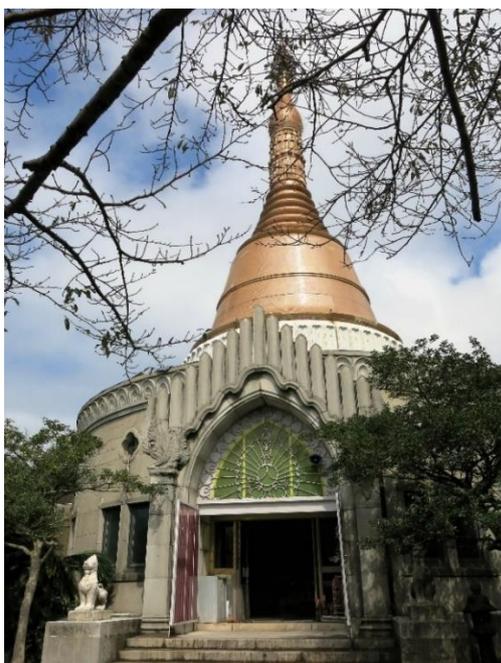
続いてディ・サルリの自作自演で「バイア・ブランカ」が架った。カルロス一押しの曲だった。センチメンタル全開の名演をあなたにも。コンシェルジュさんに感謝。

Bahia Blanca - Carlos Di Sarli - Tango Clásico

毎日がタンゴ三昧で特段危険がないことが確認できたので勝呂達はカルロス置いていったん引き上げることにした。拉致犯人たちは7泊分の宿泊費と諸経費のすべてを精算して逃亡していた。折角だから残る翌日もう一日カルロスにホテル滞在を楽しんでもらうことにしたのだった。後日判明したのだが、拉致主犯はアルゼンチン人ではなくパコと呼ばれるスペイン人だったと兄は早い時期に見抜いていた。なぜなら永年アルゼンチン・タンゴに親しんでいる兄カルロスは、ルンフェルド（主にブエノス・アイレスで使われる隠語）にも馴染んでいてアルゼンチン訛りの全くないパコを疑っていたのだ。パコはフランシスコの愛称でアルゼンチンは元より中南米ではパコではなくパンチョと呼ばれるのが普通だからだ。

その日は朝から雨模様でまだ降り続けていたが、久しぶりにレトロ門司港を散策したいからと、逸る心を抑えながら二人と別れた勝呂は、タクシーを拾うと和布刈公園へ急いだ。パゴダの手前のかつては和布刈山荘だった場所は更地になっていた。周りに気を配る。尾行者はいない。天候の良くない日だがパゴダは開いていた。誰もいない。入ってすぐ左手に参拝者名簿があり記帳を済ませた勝呂は祭壇で線香をあげるとしばらくたたずんでいた。雨が降りやむのを待ちつつ薄暗いお堂の中を見渡していると、突然雷鳴と共に雨が激しく降り出した。だがそれも束の間、一陣の風と共に突然ぱっと明るくなった。その時だったこれまでくすんでいたステンド・グラスに光が差して孔雀の文様が浮かび上がったのだ。「あっ！これってまるで聖堂のバラ窓ではないか！」マリアのあの

スカイプの画像と重なった。しかもまるでジグソー・パズルのようだ。「これだったのか！」勝呂はバッグからすばやくタブレットを取り出すとステンド・グラスにかざした。このタブレットは開発されたばかりのAIを活用した映像解析による成分判定装置になっている。これはエメラルドが瞬時に特定できるように成分比較のアプリがインストールされているのだ。果せるかな99%一致と出た。ステンド・グラスの1ピースが間違いなくエメラルドだったのだ。そして画像処理によってフェリーペII世の紋章が浮かび上がった。GRACIDのほかにPvls Ultraの文字も鮮明に映っている。これはスペイン海外雄飛・領土覇権拡大のスローガンだったプルス・ウルトラ（もっと向うに）の標語だ。いまではPuls Ultraと書くが、古期のラテン語にはUはなかったので当時はUをVと書いていたのだ。だからこれは当時の表記のままだ。これはもうフェリーペII世のエメラルド・タブレットに間違いない。「ついに見つけたぞ。それにしてもこんなところに隠されていたなんて……。なんと遠回りをしたことか……」それは進化したタブレットが失われたタブレットを見つけ出した決定的瞬間でもあった。





Elic Chan CC BY 2.0

エピロゴ（最終章）

『500年の時空を超えた思いが今』 フェルナンド・峻・世在

52年も探し求めていたお宝がついに見つかり興奮覚めやらぬ勝呂にさまざまな思いが去来した。2011年12月の暮れも押し詰まって勝呂は親戚の葬儀で実家の門司に来ていた。同じ慎光寺の境内には勝呂家代々の墓がある。葬儀の後、勝呂は寺のすぐ脇から和布刈公園の山頂に向かう急峻な近道を登った。かなりきついコースで喪服のままでは絶対無理だ。小高い公園から久しぶりに関門海峡を眺めるためだった。山頂にはかつては国民宿舎として親しまれた和布刈山荘があり、すぐ近くには金色に輝く世界平和パゴダがある。その日の海峡は霧に遮られて視界が悪く、勝呂の高校時代を蘇らすには至らなかった。その上パゴダまで閉まっていた誰もいない。1958年建立されたが今では運営資金難に陥りミャンマー（ビルマ）の僧侶も逝去し、後任の僧侶の派遣もおぼつかない様子。この分だとパゴダは取り壊されるかもしれないと言う。和布刈山荘のスタッフの話では12月から閉館しているということだった。更なる驚きはこの和布刈山荘も近く取り壊されるという。高校時代ここを訪れてはビルマの僧侶に話を聞いたことがまざまざと甦る。勝呂にとって初めての外国、そして異文化体験だった。少なからずショックを隠せなかった勝呂だったが、その後関係者の尽力が実り翌2012年8月になって世界平和パゴダが再開され、その結果くだんのタブレットは事なきを得たのだった。勝呂はこの時パゴダの閉鎖そして取り壊しによって慌てる人物が何人かいたことなど知る由も無かった。

そして1965年の7月、父親が息を引き取った日のことがまざまざと甦ってきた。慈母観音像そして勝呂の父親隆三郎の残した『翠玉板千里之行、始於足下』の謎。思えばあの時親父は（この教えをしっかりと守るのだ）と言って小さな和紙と方位磁針コンパスを手渡した。それに書かれていたのは忘れもしない毛筆で書かれた『翠玉板千里之行、始於足下』の文言だった。『千里の行も足下に始まる』という老子の一節だ。（遠大な事業も礎石の一步から始まる）という土木技師らしい父親の教えだと思っていた。冒頭の翠玉板とはやはりエメラルドのことだったのだ。コンパスの方は英語で<A Journey Of A Thousand Miles Must Begin With A Single Step>と刻印されていた。<どんなに長い道のりも初めの第一歩があったからこそなのだ>という教えだったのか。

思えば門司で客死したフリオ（父）のダイイング・メッセージが元で、残された家族を訪ねてスペインへ。それがとてつもなく長い旅になってしまった。その途上、何たることかそのフリオの息子のフリオ（モニート）のダイイング・メッセージまで受け取る羽目になってしまった。<メヒカリ>がその最後の言葉だった。それは和布刈（メカリ）のことだったのだ。そして勝呂の兄カルロスがラストの鍵を握っていた。長い勝呂の道のりは52年の長きを経て、発端となったこの門司港メカリに帰ってきたことになる。

勝呂の兄カルロスを拉致したのはウンベルト・エストラーダの差し金だったのか？それは勝呂を門司におびき寄せるための作戦だったのかもしれない。なぜならこれまで勝呂の行き先々で運転手兼ボディ・ガードとして、その実密偵として立ち働いたパコが今回も拉致の主犯だったらしいからだ。ソンドオ・グループの総帥エストラーダと娘カロリーナ、その配下のパコの暗躍。スペイン王室のキュレーターもタブレットの存在をほのめかした。そしてマリアとアロンソはノートルダム西正面バラ窓のステンド・グラスで勝呂にエメラルド・タブレットの在り処を暗示し、今年中に探索の終息を図るように迫っていたのだ。コロソ新大陸到達500年に当たる1992年に『コロソピンソン安らかに眠れ作戦』を成功させたマリアの父アムブロシオは、ピンソン家の残されたもう一つ

の使命である『ロスト・タブレット発見（フェリーペ・エメラルド・タブレット）』のタイム・リミットを25年後の2017年、つまり今年を最終成就の『特別聖年』と設定していたのである。カトリック教会では、歴代のローマ教皇が信徒たちの信仰心を高めるために「聖なる」年（ジュビレオ）を祝う「いつくしみの特別聖年」と銘打って、近年では25年に一度の周期で宗教行事を行っている。信心深いアンブロシオは生前これに因んで2017年をピンソン家の『特別聖年』と定めて逝ってしまったのだ。

そしてパゴダのステンド・グラスのワン・ピースがエメラルド・タブレットであったことをついに探り当てた快挙ですっかり気をよくしていた勝呂だったが、打ち続くテロ事件を片時も忘れる訳にはいかなかった。勝呂を打ちのめしたのは2017年5月23日の英国マンチェスターの自爆テロ事件だった。さらに追い打ちをかけるようにジャカルタの爆弾事件。そしてエジプトでも。またも防げなかったか……。エメラルド成分判定装置として見事に役目を果たしたこの装置は、元はと言えば爆発物、化学物質、起爆装置、殺傷強化の金属などを一発で見分ける危険物検知統合システムなのだ。勝呂はエメラルドを判別するために特別に改造したのだった。アプリとアクセサリを変えることによって更なる応用が可能であることを実証して見せた矢先のことだから勝呂が悔しがるのも無理はない。爆発物検知だけではなく広域防犯監視システムと組み合わせて特定人物をリアルタイムで探索・追跡するだけではなく、攻撃目標を自ら見つけ出し、殺傷する「AIキラー・ロボット」や「ストライク・デバイス（Bell the Cat）」まで完成しているのだ。

かつては敵だけでよかったのが、今では味方さえも標的にせざるをえない状況下であって、もはや誰も止められなくなった狂気や暴走に対して最新技術で立ち向かい危機を未然に防ごうというものだ。

先を急がなくては。しかしこの世界はどうしてこんなことになってしまったのか……。その時だったマリアからのスカイプの画面が映し出された。それはいつものバラ窓のマリア像でもステンド・グラスでもなかった。

¡Te felicito Gran Éxito Shio!

GRACID



Felipe II

（大成功、おめでとうシオ！ GRACID フェリーペII世より）とあった。

「えっなに！フェリーペ国王からだって！そうだったのか！和布刈で見つかったタブレットにもそういえば GRACID の文字があったぞ。今までアンブロシオの教えだとばかり思っていたのだが、あれはフェリーペ国王のオーダーだったのか。グラシアス（ありがとう）マリア」赤丸に de を入れてよこしたマリアならではのグラシア（エスプリ）に勝呂は声をあげた。「まいったなあ」。そして（全部お見通しだったのか！マリアにはまったくかなわないよ）と呟いた。なぜなら本書の表紙の効果的なアクセントになっている赤丸は正にこの瞬間を映し出しているからだ。そして de とはいえ勝呂の果てしなき迷走の旅路を招いたのが紛うことなくこのキー・ワードだからだ。あの『カルタヘーナで……』だった。

フェリーペⅡ世は1586年2月15日付で Real Cédula (リアル・セドゥラ/王室勅許証) を発出し、アントネリ要塞技師にカリブ全域のスペイン要塞補強と防衛網構築を厳命した。そのときに授けられたのが護符のエメラルド・タブレットだという。その GRACID は (本文 289 ページ) 感謝、和解、優しさ、信頼、寛容、謝罪の頭文字からなっている。これらはいずれをとっても相手をおもんばかりの大切な配慮で、難しい局面に立たされたときと解決に導いてくれる大事なキー・ワードなのだ。アンブロシオは何を思っただか巨大なジグソー・パズルを作って皆を驚かせた。そのなかに6つの特別なピースをちりばめたのだった。それらが GRACID だった。その一つにアンブロシオは『カルタヘーナへの感謝』と名付けたピースを作っていた。このワン・ピースが紛れもなくフェリーペの G (Gracias 感謝) のタブレットだったのだ。そして和布刈で見つかったピースには R (Reconciliación 和解) と刻印されている。

風雲急を告げるこの世界。宗教、民族、人種対立、経済格差、漂流難民、自国・自分偏愛を公言する狂気の権力者や独裁者の登場。そしてホーム・グロウン自国産テロリストが雨後の筍のように育っている。いまや完全に抑制力を失った人間の愚行が世界規模になってしまった。これではまるで新大航海漂流時代ではないか。この人間不信を止める手立てはもうハイテク技術しかないのか。このままでは至る所に高性能カメラを張り巡らせなければならない。監視社会にしたのは人間自身だ。技術屋の勝呂が目指してきたものがこれだったのか。本来ならこのような、ほんとは怖い領域の装置の出番があってはならないのだ。

コロン以降、先人たちが500年の時空を超えて築きあげてきたこの新旧両世界がいまもろくも壊れようとしている。今日の惨状を招いてしまったのは、先人たちの様々な思いや教えを学んでこなかったからだろう。だが世界がこのままここで自滅してしまうなどとは思いたくない。日の沈む事なき巨大帝国を御しながら、居室にはヒエロニムス・ボスの『七つの大罪』を置き、人間の罪と愚行の有様が描かれた『悦楽の園』で自らを律していたフェリーペⅡ世の知られざる帝王学をみんなで実践する時なのだ。[フェリーペⅡ世とヒエロニムス・ボスの接点の不思議 (本文 57page)]

500年の時空を超えた思いが今生かされなくてどうする。フェリーペとアンブロシオが残した GRACID (感謝、和解、優しさ、信頼、寛容、謝罪) の教えが今こそすべての人に求められる時はない。

『究極の監視システムに頼ってはならない』自称監視塔の守護神 エルネスト・隆・勝呂
ロスト・タブレット 完

